〈特集「受動表現」〉

イタリア語

花本 知子

イタリア語における最も基本的な受動表現は，英語の be 動詞にあたる essere と過去分詞を組み合わせることによって作られる．また，essere の代わりに英語の come にあたる venire と過去分詞を組み合わせて受動態の文を作ることも可能である．さらに，主語が３人称単数または３人称複数であれば，能動態の動詞に「受身の si」と呼ばれる代名詞を加えることにより，受動態の文にすることもできる．

以下，A は Mario，B は Luca とし，アンケートの表現に添って例文を挙げ，簡単な説明をつける．[1]

(ｱ) A は B に叩かれた．

a. Mario è stato picchiato da Luca.
マリオ 助・受身$_{近過}$ 叩く$_{過分}$ から_ルカ [2]
マリオはルカに叩かれた．

b. Mario fu picchiato da Luca.
マリオ 助・受身$_{遠過}$ 叩く$_{過分}$ から_ルカ
マリオはルカに叩かれた．

c. Mario venne picchiato da Luca.
マリオ 助・受身$_{遠過}$ 叩く$_{過分}$ から_ルカ
マリオはルカに叩かれた．

(ｱ)a.は受動の助動詞 essere を複合過去である近過去にし，過去に起こった受身を表現している．動作主は前置詞「da ～から」で表される．(ｱ)b.は，同じく助動詞として essere を使った例だが，essere を近過去ではなく遠過去にして用いている．現在とつな

[1] アンケートの和文を伊訳した後，イタリア語を母語とする話者のチェックを受けたものを例文として挙げてある．

[2] 助＝助動詞，助・受動＝受動の助動詞，過分＝過去分詞，…_＝「…」という意味の前置詞，不冠＝不定冠詞，定冠＝定冠詞，近過＝近過去，遠過＝遠過去，半過＝半過去，受身 si＝受身の代名詞 si

がりが感じられる事柄であれば近過去が用いられ，現在とつながりが感じられない歴史的な事実や小説の中の出来事の記述には遠過去が用いられる．(ｱ)c.は essere の代わりに venire を遠過去で活用させて使った受身である．なお，venire を使った受身の文は，複合過去では不可能であり，単純時制でのみ可能な表現である．

(ｲ) A は B に足を踏まれた．(持ち主の受身，身体部位)

a. Luca ha pestato un piede a Mario.

ルカ 助$_{近過}$ 踏む$_{過分}$ 不冠・足 において_マリオ

ルカはマリオの足を踏んだ．(＜マリオにおいて・足を・踏んだ)

b. A Mario è stato pestato un piede da Luca.

において_マリオ 助・受動$_{近過}$ 踏む$_{過分}$ 不冠・足 から_ルカ

マリオはルカに足を踏まれた．(＜マリオにおいて・踏まれた・足が・ルカによって)

(ｲ)a.の表現は能動態であり，身体部位の持ち主は間接補語「ルカにおいて a Luca」で表される．「足」を主語にし，受動表現を用いれば(ｲ)b.の表現ができあがるが，(ｲ)a.の表現のほうが使用頻度が高い．

(ｳ) A は B に財布を盗まれた (持ち主の受身，持ち物)

a. Mario è stato derubato del portafoglio da Luca.

マリオ 助・受身$_{近過}$ 盗む$_{過分}$ を_定冠・財布 から_ルカ

マリオは財布をルカに盗まれた．

b. Luca ha rubato il portafoglio a Mario.

ルカ 助$_{近過}$ 盗む$_{過分}$ 冠・財布 において_マリオ

ルカはマリオの財布を盗んだ．(＜ルカは・マリオにおいて・財布を・盗んだ)

(ｳ)a.は英語の「deprive〈人〉of～ 〈人〉から～を奪う」にあたる「derubare〈人〉di～ 〈人〉から～を盗む」という動詞句を用い,[3] 「マリオ」を主語にし，近過去で活用した essere を受動の助動詞とした受動文である．(ｳ)b.は他動詞「～を盗む rubare～」を使用した能動文である．

[3] del は前置詞の di と男性名詞単数形につく定冠詞 il の結合形である．

(エ) 昨日の夜，私は赤ん坊に泣かれた．それでちっとも眠れなかった．（自動詞からの間接受身）

a. Ieri il bambino mi ha pianto tutta la notte,

昨日 定冠・子供 私に 助$_{近過}$ 泣く$_{過分}$ ～中・定冠・夜

non ho potuto dormire per niente.

～ない 助$_{近過}$ 可能である$_{過分}$ 眠る まったく

昨日の夜中じゅう，私は赤ん坊に泣かれた．まったく眠れなかった．

b. Mi è morto il padre.

私に 助$_{近過}$ 死ぬ$_{過分}$ 定冠・父

私は父に死なれた．（＜私に影響が及ぶことに・死んだ・父が）

(エ)a.の文にあるように，イタリア語では「赤ん坊が泣いた」という表現に間接補語人称代名詞[4]「mi 私に被害（あるいは利益）が及ぶことに」をつけると，日本語の自動詞からの間接受身にほぼ相当する意味をを表現することができる．(エ)b.は同じく間接補語を使い，自動詞からの間接受身を表現したもう一つの例である．

(オ) 新しいビルが（A によって）建てられた．（モノ主語受身，一回的）

a. Un nuovo edificio è stato costruito (da Mario).

冠・新しい・建物 助・受身$_{近過}$ 建てる$_{過分}$ (から_マリオ)

新しいビルが（マリオによって）建てられた．

(オ)a.は「ビル」を主語にし，受身の助動詞 essere を近過去で使った，最も基本的な作り方による受動文である．

(カ) カナダではフランス語が話されている．（モノ主語受身，恒常的，動作主が問題にならない場合）

a. In Canada si parla francese.

のなかで_カナダ 受身 si 話す フランス語

カナダではフランス語が話される．

(カ)a.は受身の代名詞 si を用いた文である．「フランス語」が主語であり，３人称単

[4] 間接補語人称代名詞の基本的な用法は，「～に…を与える」と言うときのように，動作の間接的な受け取り手「～に」を表す用法である．

数で活用させた動詞「話す parlare」の前に si を加えると，能動文から受動文へ変化する．なお，代名詞 si にはさまざまな働きがある．３人称単数で活用した他動詞の前につけられ，かつ直接補語が明示されていない場合，この代名詞は「非人称の si」と呼ばれ，動作主が「人一般」であることを表す．

(ｷ) 財布が（A に）盗まれた．（モノ主語受身．モノ主語の背後に被影響者が想定される）

a. Il portafoglio è stato rubato (da Mario).

冠・財布　助・受身$_{近過}$　盗む$_{過分}$　(から_マリオ)

財布は（マリオによって）盗まれた．

(ｷ)a.は(ｵ)a.と同様に，動作や行為の対象を主語にし，受身の助動詞 essere を近過去で使った，最も基本的な作り方による受動文である．

(ｸ) 壁に絵が掛けられている．（モノ主語受身，結果状態の叙述．）

a. Un quadro è appeso al muro.

不冠・絵　助・受身　掛ける$_{過分}$　に_定冠・壁

壁に絵が掛けられている．

b. Viene appeso un quadro al muro.

助・受身　掛ける$_{過分}$　不冠・絵　に_定冠・壁

壁に絵が掛けられる．

(ｸ)a.は「壁に絵が掛けられている」という状態と「壁に絵が掛けられる」という受身の動作の，二つの意味を表しうる．(ｸ)a.の場合，動作主が前置詞 da によって明示されていないために「結果状態の叙述」と解釈される可能性が高まる．「結果状態の叙述」ではなく「受身の動作」であることを誤解なく表すために受動の助動詞として essere の代わりに venire を用いた文が(ｸ)b.である．

(ｹ) A は B に／から愛されている．（感情述語の受身，特に動作主のマーカーに注目）

a. Mario è amato da Luca.

マリオ　助・受身　愛する$_{過分}$　から_ルカ

マリオはルカによって愛されている．

(ｹ)a.は，essere を受動の助動詞として用いた，最も基本的な受動文の作り方であり，動作主はやはり前置詞「da ～から」で表される．

(ｺ) A は B に／から「...」と言われた．（伝達動詞の受身，特に動作主のマーカーに注目）

a. Mario è stato messo al corrente da Luca che...

マリオ 助・受身$_{近過}$ 置く$_{過分}$ に_定冠・物事の流れ から_ルカ ～と

マリオは... ということをルカによって知らされた．

b. Luca ha detto a Mario che...

ルカ 助$_{近過}$ 言う$_{過分}$ から_マリオ ～と

ルカはマリオに... と言った．

c. Luca ha detto a Mario di + 不定詞.

ルカ 助$_{近過}$ 言う$_{過分}$ から_マリオ ～するように

ルカはマリオに... するようにと言った．

(ｺ)a.と(ｺ)b.の文では「...」にあたる内容が指示（「勉強しなさい」等）ではないと仮定した場合の表現であり，(ｺ)c.の文では「...」が指示であると仮定した場合の表現である．(ｺ)a.は「知らせる」を表す他動詞句「mettere al corrente〈人〉」[5]を使い，受身の助動詞 essere を用いてマリオを主語とした受動文である．(ｺ)b.はルカを主語にし，動詞「言う dire」を能動態で使用した能動文である．

[5] 慣用句「mettere al corrente〈人〉」を使う際，イタリア語話者においては一語一語切り離して「〈人を〉・物事の流れに・置く」と意識されるわけではないが，この表現の構成要素がわかるようにグロスを付した．なお，「al」は「～に」を表す前置詞「a」と男性名詞単数形につく定冠詞「il」の結合形である．